
Nemo enim potest omnia scire

かなえ秀雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N e m o e n i m p o t e s t o m n i a s c i r e

【Nコード】

N1750V

【作者名】

かなえ秀雄

【あらすじ】

魔術師見習いの少女フルーオラータ（愛称：ホタル）は、ある日の買い物帰りから、徐々に本人も想像していないような事柄に巻き込まれていく（予定）……。恋愛要素はあるような、ないような？

雲一つない晴れ渡った蒼穹に浮かぶ太陽は、地上に柔らかい春の日差しを届けている。

天気が良い事もあってか、魔術師の国テラ・マゴルムマルクト行政区の商店街は沢山の人々が行き交い、賑いを見せている。

その中に、買い物袋を抱えながら帰路に着く三人の若者の姿があった。

「うっふふ、今日も上手に値切れましたあ」

御伽噺に出てくるような魔女を連想させるトンガリ帽子を被った少女は、戦利品であるオレンジが入った袋を見つめながら、にんまりと笑う。

鮮やかなオレンジの髪に青味を帯びた緑瞳が印象的なフルーオラータは、「螢石」から取られた名前から「ホタル」と呼ばれており、大人しそうな外見とは裏腹に商店街で商いをしている人々からは値切り名人の一人として密かに恐れられている。

値切りに成功した喜びに浸っている彼女の姿を、保護者であり魔術の師匠でもある長身の青年が呆れたように眺めていた。

「……ヒスイの奴も値切り上手だったが、あいつはそれ以上だな。やっぱり、クーシャの血が入ってるせいかな？」

ヒスイとはホタルの父、クーシャとはホタルの母であり、青年の師匠のことだ。

8年前に共に亡くなった二人の姿を思い浮かべると、短く刈った黒髪と鋭い黒瞳の魔術師オブシディアンは深い溜め息を吐いた。

おっとりとして人当たりの良かった父親の方に似るのは何ら問題はない。だが、自らの師であった母親に似るのは多少困る。二人のことをよく知っているが故に、オブシディアンはそう思ったのであった。

「ホタルはヒスイ似だよ、間違いなく。寧ろクーシヤにそっくりなのは旦那の方だね。口の利き方とか態度とか、本当にそっくり……」

「あん？」

オブシディアンシンの隣を歩く、黄味の強い薄い茶髪と赤茶色の目の青年の姿をした守護者アガットが笑いながら呟くと、旦那と呼ばれたオブシディアンはじろりと彼を睨みつけた。

（その反応がそっくりなんだって）

魔術師と契約を交わし、彼らを補佐し守護する人ならざる存在——ジンであるアガットは、以前契約を交わしていた彼の師匠を思い出し、苦笑する。

「あ、そういえば……」

意気揚々と先頭を切って歩いていたホタルが徐に足を止めて、くると方向転換をする。

「先程小耳に挟んだのですが、近々セフィラの管理者が交代するのだそうです」

彼らが暮らしているテラ・マゴルムは、巨大な魔術師組織アルボル・ア
ニムエ“樹”によって統治されている。

“球”セフィラという十のパーツと其々を繋ぐ“径路”パスで構成されている半

恒久エーテル生成供給装置”セフィロト”は、魔術や生活に必要なエネルギー——エーテルを生み出し続け、テラ・マゴルムを支えている。

マルクト行政区にはセフィロトのパーツの一つ、”セフィラ・マルクト”が安置されており、ガレナという老魔術師が管理者として据えられていた。

「ガレナおじいちゃんとは、お別れをしなければならないのでしょうか？」

少々耳が遠いので大きな声で会話しなければならないのが難点ではあるが、人柄が良くお茶目で粋な好々爺であるガレナを、マルクト行政区の住人の多くが慕っている。

ホテルもその内の一人で、近々やってくるであろう別れの日を想像し、一抹の寂しさを覚える。

「じいさんじゃ、何時でも何処でも自由にあの世に逝けちまうからな。もつと早い内に交代しとけっつーの、そうすりゃあ俺が手伝いに行く必要がねえしな」

オブシディアンは魔術の他に、セフィロトや”アーティファクト魔道具”の核を構築する技術の一つ、”アルス秘術”を習得しており、魔道具の核の修理を請け負い、生活費を稼いでいる。修理の腕前はなかなかのもので、それを知ったガレナに頼まれて、時折彼の手伝いをしているのだ。年齢七十を過ぎた老人であるガレナに、巨大なセフィラを一人で管理するのは難しい。

「旦那、セフィラの整備をしてる時は……楽しそうだけどね？」

「五月蠅せみえ、ガガ」

口では面倒だ、嫌だ、日銭が貰えるから行くだけだと言いつつも、彼が高齢のガレナのことをよく気にかけていることをアガットは知っている。オブシディアンがじろりと一瞥をくれてやると、アガットはやれやれとばかりに肩を竦めてみせた。

「じゃあ、二重に寂しいですね」

「寂しくねえ、ちつとも寂しくねえっ」

顔を引き攣らせ、鋭い目を一層吊り上げたオブシディアンは、大股でずかずかと歩き出し、二人を置いていつてしまふ。からかってみたことで機嫌を損ねてしまったかと思い、彼の後姿を見てみれば、耳が赤くなっている。

——凶星を指されて、照れてしまっているようだ。

「先生は素直じゃないですね」

「そうだね」

ホタルとアガットは顔を見合わせて、にっこりと笑う。そして、先に行ってしまったているオブシディアンを早足で追いかけたのだった。

1 - 1 (後書き)

誤字・脱字等々御座いましたら、御連絡頂けますと幸いです。

人通りの多い商店街を抜け、閑静な住宅街へとさしかかった頃だ。何処かから耳を劈くような女性の悲鳴が聞こえてきた。三人は反射的に足を止めて、それが聞こえてきた方向へと顔を向けた。

「嫌あ~~~~っ!!!!」

二十代前半と思しき茶髪の女性が、何かから必死に逃れるように此方の方へと走ってきている。

（あや？）

艶やかな巻き毛と碧眼、そしてグラマラスな体型に見覚えがある。確か彼女は、花屋の看板娘ベニータではなかっただろうか？花屋の定休日は今日ではない筈だが、こんな所で何故走っているのだろうとホタルは首を傾げる。

もうすこし視線をずらしてみると、彼女を追いかける小柄で太目の男の姿が目に入った。

汗を滝のように垂れ流し、持てる力を全て発揮しているようだが残念ながら速度は伴っておらず、前を走るベニータを追いかけるだけで必死のようだ。

「もー、しつっこいのよ！お断りしますって何度も言ってるでしょう!？」

体力の限界が来てしまったのだろう。ベニータは走ることを諦めて足を止め、今尚走り迫ってくる男を睨みつけながら怒鳴りつけた。

「はーっ、はーっ、っ、つれない、はーっ、人だ、なあっ！はーっ、少しくらい、はーっ、付き合ってくれ、ても、はーっ、良いじゃない、かつ、はーっ！」

「生理的に受け付けられないのよ、無理！！！」

肩を大きく上下させて、荒くなった息を整えつつ喋っているので、男が何を言わんとしているのかが聴き取り難い。だが、ベニータには解読出来たらしい。

生理的に受け付けられない、と評された男の用紙についてだが、身長は一般男性の平均身長よりは幾分か低めだ。そして胴長短足で樽の様な体型をしており、顔はというと目は離れ気味で両生類を連想させるような作りをしている。

人によつては愛嬌のある顔と言われるのだろうが、目の前の彼女には拒絶反応しか与えないようだ。

そんな男に追い掛け回されたせいで彼女の我慢も限界に達したのだろう、ベニータは般若の如き形相で男を只管に睨みつけている。

「痴話喧嘩……ではないですよ？どう見ても……」

ベニータのことは知っているが、男の方はこの辺りでは見たことがないなあと小首を傾げているホタルの横で、アガットはただただ苦笑いを浮かべている。そんな二人の五歩ほど先にいるオブシディアンは何故かがつくりと肩を落とし、項垂れていた。

（あの馬鹿、久し振りに見た……）

きつと二度と視界に入れることはないだろう、そう信じていたのに。そうだ、見なかった振りをしたら良いのだ。そうとも、現実逃避も偶には必要だ。

さあ、この場から早々に立ち去ろうと決めたオブシディアンが顔を上げた時だ。

「僕はセフィラ・マルクトの次期管理者だ。将来は安泰なんだよお」
「？」

漸く呼吸が整ったらしく、今度は聞き取りやすい声で男は鼻高々とばかりに言い放つ。

（マジかよ、最悪じゃねえか！！！）

再びオブシディアンが悲しみに打ちひしがれて肩を落とすと、いつの間にやら傍にやって来ていたアガットが「御愁傷様」と呟きながら彼の肩を軽く叩いた。

どうやらこの二人は、男の正体を知っているらしい。

「将来が安泰だろうが何だろうが、お断りよ！誰が付き合うか、こんの不細工！！！」

ああ、そういえばベニータは面食いだった。ふと、ホタルは思い出す。

「不細工！？愛嬌があつて愛らしいと両親に褒められる僕が不細工だって！？無礼な、管理者に逆らうというのか！？」

拒否をし続けるベニータに、終に男の堪忍袋が切れる。嫌がる彼女の腕を掴み、強引に何処かへ連れて行こうとする。

周囲には騒ぎを聞きつけた野次馬が十数人程いるのだが、ベニータが助けを求めて叫んでも、誰も救いの手を差し伸べようとはしない。

(……仕方がねえな)

面倒事に首を突っ込むのは嫌だが、見て見ぬ振りをするのも気が引ける。先程それをしようとしたのは、この際忘れる。オブシディアンは腹を括る。

「あの、嫌がっておられますので、手を離してあげてください」

聞き覚えのある声と、見覚えのある姿が其処にあった。男とベニータの間に割って入る、トンガリ帽子の少女が。

反射的に振り返ると、其処にいる筈のホタルの姿がなかった。それはそうだ、あそこにいるのだから。

「ガガ、止めなかったのか？」

「いやあ、気が付いたらあんな所にいて、俺も吃驚です」

主人の問いに、ジンは虚ろな目をして答えた。

(えー……?)

予想外の出来事が起こり、オブシディアンは混乱状態に陥る。

餌を欲して水面に顔を出す金魚宜しく、口をパクパクと開閉させて動揺している主人の姿にアガットは噴出しそうになるが何とか堪える。ここで笑えば、怒り狂った主人に悲惨な目に遭わせられる事は分かっているから。

オブシディアンとアガットがそんなことをしていると全く気が付いていないホタルは、自分を訝る目で見える男に対して、毅然と物申す。

「こんなにも嫌だと仰られているのですから、諦めた方が良いと思います」

「ホタルちゃん……」

人が嫌がることをするのは、いけないことだ。

そう教えられて育ったホタルは、真摯な眼差しで相手に訴えかける。

「何だ、貴様は？ 僕が誰なのかを知っていて、そんな口を利くのか？」

「セフィラ・マルクトの次期管理者であると、先程聞いています」

彼女がそう答えると、男は鼻で笑い、ふんぞり返る。

「僕はね、”生命の樹”の最高幹部セラフィムの一人、グラフィテスが子息にしてセフィラ・マルクトの次期管理者オパルス様だ！」

「オパルスさん、ですね。ボクはフルーオラータと申します、以後お見知りおきを」

自信満々に名乗りを上げたオパルスに、ホタルは名乗り返すと深々とお辞儀をした。

「ん？」

このように名乗ると、大抵の者はオパルスの背景にあるものに恐れをなして平伏し、許しを請うたり、媚を売ってくるのだが、それ以外の反応が返ってきた。オパルスは目を点にして、硬直する。

「な、何が何だかよくは分からないけど、助かったわ！有難うね、ホタルちゃん！」

「あ、はい」

オパルスの思考が停止してしまっている今が好機と見て、ベニータは「今度お店に来てくれたらサービスするから！」と言い残して、脱兎の如く逃げ去っていった。

（とりあえず、これで良いのでしょうか？）

ホツと胸を撫で下ろした時だ、オパルスが我に返る。

「あーっ！！！貴様のせいで、折角ナンパした娘を逃がしてしまっ
たじゃないか！どうしてくれるんだ、下民の分際で……っ」

怒鳴り散らすオパルスは、ふと何かに気が付いて、はたと口を噤んだ。そして一寸考えた後、にやりと笑った。

「貴様、十人並みのようだが、そこそこ可愛いではないか。仕方がない、貴様で我慢してやろう」

「へ？」

事情が飲み込めず、頭の上にハテナを三つほど浮かべているホタルの腕を掴もうとして、脂ぎってテカテカと輝いているオパルスの手が伸ばされる。

その時、誰かの大きな手がオパルスの頭をがしつと鷲掴みにした。

「誰が、十人並みだつて？」

どう見ても、うちの子は可愛いだろうが！

「あ、先生……」

額に青筋を浮かべ、黒瞳に怒りの炎を宿したオブシディアンが、口元を引き攣らせながらオパルスの背後に立っていた。

その凶悪な表情と、どす黒い負のオーラに気圧されて、遠巻きに出てくる観客の子供が一斉に泣き出す。大人もまた、青ざめて言葉を失っている。彼らの心中は、これから凄惨な殺人劇が繰り広げられるのではないかという不安と恐怖でいっぱいになる。

「ホタル、帰るぞ。こんな馬鹿の相手をしてると、馬鹿が移る。重症化して手に負えなくなつて、最終的には両生類になる」

「誰が馬鹿だ！然も病原菌扱いをするな！！！」

ぎりぎりと締め付けられて痛む頭を何とか動かして、自分に無礼を働いている人物の顔を確認した途端、オパルスは瞠目した。

「ききき貴様はオブシディアン！？な、何故こんな所に！？いや、貧民である貴様には似合いの場所だな！」

侮蔑の言葉を投げかけられたオブシディアンは、頭一つ半ほど下にあるオパルスの頭を見下ろす。

「黙れ、オーパーラーパー。何でてめえみてえな残念極まりない小物が、セフィラの管理者に選出されるんだよ。親の七光りか、ああ？とち狂ってんじゃないのか、セラフ共は」

「オーパールーパー！？僕の名前はオパルスだと言っているだろう、この貧民が！どこの生物のように呼ぶな！！！」

どこぞの生物とは、響きから察するに”ウーパールーパー（正式名称：メキシコサラマンダー）”のことだろうか。そう言われてみると、似ていなくはない。御丁寧にも、彼の即頭部には外鰓を連想させる癬毛が三本ずつある。顔の作りもまた、どこことなくそれに近い。オブシディアンは的確な名称を付けたものだ、と、荷物の番をする羽目になったアガットは思ったのだった。

「あゝ、御知り合いなのでしょうか？」

「単なる赤の他人だ。知り合いだなんて、冗談じゃねえよ」

恐る恐るホタルが尋ねるとオブシディアンは眉根を寄せて、しかめっ面をして否定した。二人の会話の内容を聞いている分には、二人には面識があるように思えるのだが、どうやら彼は認めたくはないらしい。

「……今日のところは見逃してやる、とつとと消えろ」

乱暴に肩を掴んでホタルから引き離すと、オブシディアンはオパルスの背を強く押した。それによってバランスが崩れたオパルスは蹠鞬を踏む。

「……オブシディアンのぶゝか！見た目も心を真つ黒々助め！パパに言いつけてやるんだかな、覚えるよ！」

オパルスはあっかんべーをして、その場から逃げ去っていった。

(……あいつ、確か俺より一つか二つ年上だったよな?)

オブシディアンは今、二十三歳だ。よって、オパルスは二十四、五歳ということになる。

いまだ親の七光りと保護を最大限に利用して生きているのかと呆れつつ、それもまた生き方の一つかと納得しかけた。

「どうにかなったみたいだね?」

騒ぎが終わりを告げると、観客はばらばらと散っていった。その場に残った二人の許に、両腕に荷物を抱えたアガットが歩み寄る。

「……さて、ホタル」

「……はい」

これから起こることを予測しているホタルは、縮こまっている。するとじつと彼女を見下ろしていたオブシディアンは、むにと彼女の頬を摘んだ。ホタルは思わず身を強張らせたが、かなり手加減をして摘まれているので然程痛くはない。

「考えもなしに突っ込んでいくな、アホタレ」

今回はオパルスが相手で、且つオブシディアンがいたのどうにか事無きを得たが、そうはいかない場合もあるのだと、彼は諭す。

「……御免なさい」

素直に謝罪して、ホタルはしょんぼりと肩を落とす。その様子を一瞥したオブシディアンは、彼女の頬を摘んでいた手を放すと明後日

の方向に目を向け、首の後ろをぽりぽりと掻いた。

「……困ってる奴を助けようとする事自体は、悪いことじゃねえよ」

ぼそりと呟くと、弾かれたようにホタルが面を上げた。その言葉が嬉しくかったのか、曇っていた彼女の表情がぱあっと明るくなる。

「今後、十分に気をつけます！」

「……ん」

吊り上った目元が微かに下がり、口の両端が微かに上がる。

普段の仏頂面と変わりないようにも見えるが、ホタルやアガットにはそれがオブシディアンの笑みであることを知っている。

「本当、ホタルに甘いんだから、旦那は……」

「喧しい。灰にすんぞ、ガガ」

得意の”火の魔術”^{マギア・イグニス}で綺麗に焼いてやろうか。

アガットが呆れたように呟くと、オブシディアンは直ぐに仏頂面に戻り、彼から荷物を幾つかぶんどると歩いていつてしまった。本人は隠しているつもりのようなだが、耳が赤くなってしまっているのの意味がない。

——やはり照れているのか。

その姿を暢気に眺めていたホタルとアガットは、ふふ、と笑い、ずんずんと進んでいくオブシディアンの後を追いかけた。

1 - 2 (後書き)

誤字・脱字等々御座いましたら、御連絡くださいますと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1750v/>

Nemo enim potest omnia scire

2011年10月9日13時27分発行